

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-133	A-169	16-071 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p>Changes in poisonings among adolescents in the UK between 1992 and 2012: a population based cohort study. イギリスにおける 1992 年から 2012 年間の青年期における中毒の変動</p>		
執筆者		
Tyrrell EG, Orton E, Tata LJ.		
掲載誌		
Inj Prev. 2016 Dec;22(6):400-406. doi: 10.1136/injuryprev-2015-041901.		
キーワード		PMID
中毒、青年期、アルコール		27185793
要 旨		
目的：		
<p>中毒は青年期における死亡の要因の一つである。しかし、現在の罹患率経時的な変動を記述するための調査は不足しており、政策の発展やサービスの計画を難しくしている。一般集団におけるプライマリケアのデータを利用してイギリスでの青年期の中毒率を評価した。</p>		
方法：		
<p>The Health improvement Network から得られるプライマリケアのデータを用いて、1992年から2012年間の青年期10歳から17歳の1,311,021人を対象としたコホート研究を行った。発生率、調整済み発生率と95%信頼区間は、すべての中毒、意図的、非意図的、意図は不明、飲酒に関連した中毒を、性、年齢、時期、社会的格差で層別して計算した。</p>		
結果：		
<p>すべての中毒の罹患率は、1992-1996年から2007-2012年間に27%増加傾向を示した。最も増加傾向がみられたのは、意図的な中毒・16-17歳の女性（発生率 391.4/100,000 人年、信頼区間 328.9-465.7 から、767.0/100,000 人年、信頼区間 719.5-817.7 に増加）とアルコール関連中毒・15-16歳の女性で、（発生率 65.7/100,000 人年、信頼区間 43.3-99.8 から 130/100,000 人年、信頼区間 110.0-150.0 に増加）。社会経済的格差は時代によらず関連がみられた（最も低い格差に対する最も高い格差における中毒発生率 2.63 倍、信頼区間 2.41-2.88 倍）。</p>		
結論：		
<p>青年期の中毒、特に意図的な中毒は、増加傾向があり、健康格差とも関連していた。青年期における社会的、心理的支援は、最も格差がある地域を対象に行うべきである。子供や青年期のメンタルヘルスや飲酒に対する支援は必要性を反映して行われるべきである。</p>		